

日本図の変遷

～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

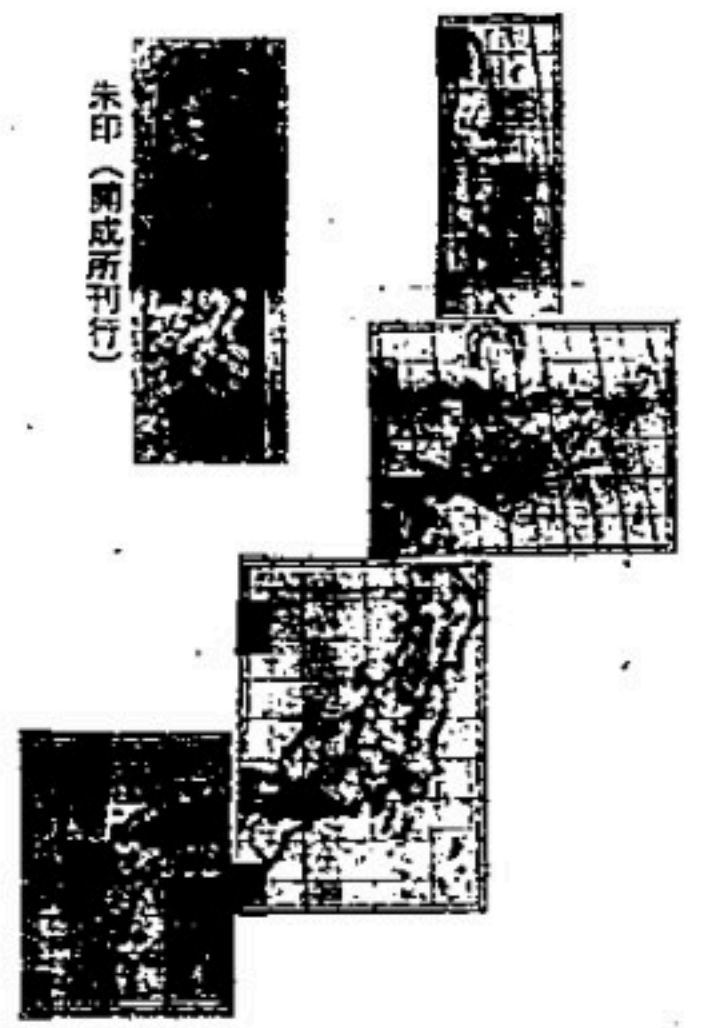
... 22

ちの大学南校・東京帝国大)から随時出版された。

「官板実測日本地図」は、「北蝦夷」(樺太・サハリン)、「蝦夷諸島」(北海道)、「畿内東海東山北陸」(東日本、付図「小笠原群島総図」)、「山陰山陽南海西海」(西日本、付図「琉球諸島総図」)の四枚からなる『写真』。北蝦夷南部には十七世紀後半以降日本人が漁業進出していたが、十九世紀になると石炭を求めてロシア人が南下し、南樺太は日露雑居状態となった。他方、当時、琉球王国(現在の沖縄県)は薩摩藩の間接支配を受けていて、帰属が決まっていなかった小笠原群島について江戸幕府は領有権を宣言している。開国間もない江戸幕府には、諸外国に対してこれらの地域を日本領土としてアピールする狙いがあった。

開国と「官板実測日本地図」

他国からも海岸線が正確な伊能図が求められたため、幕府は伊能小図をベースに「官板実測日本地図」の刊行を企図し、六三年設置の開成所(の



ただし、これらの地域は最終版伊能図「大日本沿海輿地全図」の描画範囲外である。古地図研究家の高木崇世氏によれば、伊能図以外の地域については国内外の地図を参考に編集されたとみられる。「大日本沿海輿地全図」小図に記載の内容は「官板実測日本地図」におおむね踏襲されているが、墨・薄墨・青(水部)の三色刷り木版図では、凡例は十一項目となり、方位線や天測地点などは省かれている『同』。本図は、六七(慶応二)年のパリ万博に出品され、時のナポレオン三世にも贈呈されている。

(むらゐ・しよん)＝
徳島大名普教授)

「官板実測日本地図」と
富士山周辺の表記(徳島
大付属図書館蔵)